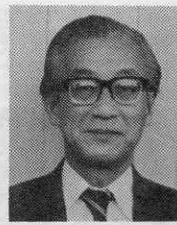


# 風窓會報

東京都立大学附属高等学校  
同窓会機関誌 第20号  
発行日・昭和54年1月30日  
発行所・目黒区八雲1-1-2  
都立大学附属高校同窓会  
☎03-723-9966  
発行人・内野滋雄  
編集人・野口貞義・杉浦清子

## 創立30周年を迎えて

学校長 加崎英男



わが附属高校は、戦後の学制改革により旧制都立高校から新制都立高校として発足し、今年で30

の秋には木造の新校舎も完成してようやく新制高校としての形が整うこととなったわけです。現在鉄筋4階建、18学級の規模から見れば誠にささやかなものであったといえます。

年を迎えました。さらに母体である旧制高校の創立より数えれば来年は50周年となります。先づもって心から祝意を表する次第です。この記念すべき時に過去を顧み将来への展望をもって新たな発展を考へる事は意義深い事と存じます。新制高校の出発は戦後間もない昭和23年の4月でした。当時の食糧事情を象徴するように校庭に芋畑の拵がっていたことを思い出します。当初は旧制都立高校尋常科4年生がそのまま名称だけ東京都立新制高等学校全日制の第一学年を名乗る格好で発足しましたが、私はたまたまこの学級の担任であっただけに感慨深いものがあり忘れることができません。翌昭和24年には旧制尋常科の最後の学年が一年に編入、女子生徒の転入を加えて男女共学も始まりました。折しも都立大学もこの年に発足、これに伴って校名も都立大学附属高校と改まり今日に至っています。昭和25年4月からは全学年がそろい、こ

所での新制切り替えに当っては、当時の旧制都立高校長で新制初代高校長を兼ねられていた森脇大五郎先生の御苦心と、これを助けられた安岡善則教授（本校第8代校長、当時庶務課長を兼務）の御努力を忘れることはできません。旧制時代の中学5年と高校3年を一本にし、尋常科4年高等科3年の7年制高校として当時ユニークな存在であった旧制都立高校の高等科・尋常科の関係を、学制改革に当り新しい形の中で生かすよう、非常な努力を重ねられた結果が「附属高校」の設立に結びついたものとうかがっています。

わが附属高校は出発以来幾多の試練を経て今日に至りました。学校紛争の嵐に揉まれ、また、学校群制度の余波を蒙り、好むと好まざるとに抱えず受けた影響の大きかった事をつくづく感じさせられます。今ようやく落ち着きを取り戻し新しい出発を目指す時機にこの記念すべき30周

年を迎えたことは誠に意義深いものを感じます。折しも都立高校では「特色づくり」がうたわれています。わが校は今こそ新制出発時の趣旨に副って一貫性教育の流れを現在に生かすべく大学との接触を深め附属性を強め、特色をのぼすこと

## 受け継がれた伝統

理事長 内野滋雄（一期）  
東京医科大学教授



昭和23年4月、旧制都立高等学校尋常科が母体となり、都立大学附属高等学校の前身「東京都立新制高等学校」が発足して30年になる。

当時、学制改革により旧制の高等科は都立大学となったが、尋常科の存続は危ぶまれた。「廃校」「近くの旧制中学と合併」などの噂が流れた。我々尋常科の生徒は非常に動揺し、学校当局に存続を迫った時、涙もろい鈴木三之助先生が、「君達を路頭に迷わせるようなことはない」と泣いて誓ってくれた。事実、森脇大五郎、安岡善則、松岡正雄、鈴木三之助ら諸先生の働きもあり、廃校にも合併にもならず、新制高校として発足したわけである。

そして、旧制高校の校章、校歌、校旗と、「自由と自治」「真理の探究」などの伝統は新制高校に受け継がれた。

翌24年の4月には東京都立高等学校と改称、20名の女子生徒の入学、都立大学では第1回生の入学があり、更に旧制高校の学生も居て雑然としていた。

24年12月、東京都立大学附属高等学校

が一つの道であるように思われます。また校風として旧制高校以来脈々と流れている伝統を生かし、自治と自由を真の意味で取り戻し、明るく伸びやかな学校造りにさらに一丸となつて邁進したいものと念願する次第です。

と改称され、2月に小笠原録郎先生が校長に就任してからやつと落付きが出てきた。

当時から部活動は極めて盛んで、文化部などでは特定の知識に関しては専門家以上という連中も多かった。自らを律し自由に学ぶこの風潮は、伝統である「自由と自治」の一つの表現であったのかも知れない。それは今でも残っているようだ。教育実習にきた若い先生が、「明るく、のびのびした、自由の気風」に驚いているという。

都立大学附属高校同窓会の設立準備は1期生の卒業する半年前から始めた。問題はいかにして全員から会費を確実に徴集し財源を確保するかである。迷案がいくつが出たが、結局、学校当局の協力を得て、在学中に積立て、卒業の時点で同窓会会計に入れてもらうことにした。事務の大野さんの手を最近まで煩わせたが今では事務局にお願いしてある。この方式が続いたからこそ、兎にも角にも同窓会が消滅せずにすんだし、活動を再開することもできた。

同窓会は如何にあるべきかという点については、考え方に個人差が多く結論は

# 都高よ、よみがえれ

齊 正子  
現職員

府立高校が創立後20年で新制にかわり都大附属高校となって今年30周年を迎える。多くの英才を出した学校である。今年文化勲章をうけられたがんセンター研究所長杉村隆氏も本校の卒業生で生物部員であった。彼が入学した年に私も本校に赴任した。昭和18年のことである。

旧制の尋常科が移行して新制の12期生となり、3期生からは新制中学から入学してきた。みんな本校に入学できたことを誇りとしていた。優秀な生徒たちであった。優秀とは多分に性格的なもので教えられることをよくきいて、理解した上で自分で考えるという集中力のあることを云うものだと思った。

年々に入学してくる学年は、社会の風潮をうけながらそれぞれ特徴を現していた。5期生から芽ばえ678期には自治活動が華かに開花し、自治の最盛期を迎えた。高校時代にはじまる自覚、自我の確立といった事が、友人を求め友人と話合う間につちかわれて思想の基盤をつくり、ひろく社会にも眼をむけて、人生の旅立ちへの準備を始めさせている事を思わせた。

安保闘争のはげしい影響をうけたのは1213期であった。国中が渦中に巻き込まれた闘争であったから彼等の眼は政治にむけられ、生徒達でデモにいった。教師に見守られながら。13期には教育問題に眼をむける人が多く在校生に影響を与えた。ベビーブームが来て16期は7学級になったがその後は6学級で固定した。自治と自由、真理の探求、人間形成の伝統の

下に師弟の信頼関係はまことに厚かった。

昭和42年施行の学校群制度ではじめて入学した20期生の時に学校紛争が爆発した。民主教育の形骸化を叫んだ紛争であった。都大附属ほどよい学校はないと云い乍ら紛争をはじめた。全否定の紛争だったから破壊だけで建設のないところに悲劇があった。都立大学でも紛争がありすべて終つたのは附属高では昭和51年といえよう。長い年月が、本校のまれにみる良き伝統の灯を消し、惜しい先生方をやめさせていった。よりよき伝統の建設はいつのことであろうか。

昔の師弟関係を一人の卒業生がこういふた。「先生たちは個性的で中学から入学したばかりの生徒には、一寸背のびをしながら大きく講義に学問の香りを感じました。」平素脱線ばかりする先生が批判をうけた時、その先生が逆に説得される学問の奥行を知って感心しました。「批判をうけたクリスチャンの先生が人間のさまざまな営みを見透しておられる、その人間の大きさにすっぱり包まれたような気がしました。」大学からきた講師の先生も含めて教科書を余り使いませんでした。緊張した授業がすむと皆でフーッと息をしました。そんな先生方が校庭では気安く話かけて下さいました。先生方が全部よかつたわけではあるまい。多分生徒自身がつくつた畏敬と憧憬の幻影もあるう。しかし教育にはそれが要る。学校を誇りとし、教師と生徒の深い信頼関係の確立がある。「どういきるか」は生徒の問題であり、教師団には話合いがある。

●一頁より続く  
出ない。同窓会不要論もあつて、名簿に氏名を載せることすら拒否する年度がある。私は積極的に同窓会を解散する意義も認めないし、卒業した以上氏名を抹殺

## 現代都高生気質

平島 成夫  
現職員

都高生気質といわれるものは、何段階かに変遷しながらこんにちに至つたようだが、現在見える点を報告します。

視野狭窄症というのがあるようですが、そんな広がりもなく次第に近視眼的になる症状があるとすればそれは何と呼んだらいいか、いまの都高生の持つ傾向にそのようなものがあります。将来への希望どころか、近い将来も見えないで行動し、結果の重大さに初めて驚く体たらくです。総裁選で勤ちがいをしたおとなたちがいるほどの、いわば不確実性時代だから無理からぬことといえるかもしれません。

どこの子も同じかもしれないませんが、悪ずれない都高生は皮膚感覚でだけ反応しているさまを直接的に露呈します。善悪正不正よりも、行動基準は快不快となつ

することも理に合わないと考えている。会員の消息や母校の状況などを知らせ、できるだけ正確な名簿を発行することが会の大切な仕事だと考えている。

甘つたれた過保護の反映です。

これは激しさのなさとともに、持続するネジのエネルギーを失なっていることにもあらわれています。繰返しの挑戦ができなくなつてきているように見えます。温和であるようにみえるのは26期あたりから男女半々になつた級編成の外面的あらわれであるかもしれません。

しかしこれらは能力の低さではありません。意欲の問題であると考えられます。強制されたことをこなしていく力はあるのですが、自発的に創造し変革していくということが考えられないようです。自分たちの能力に気付いて現状から脱皮していけるように、学校はどう手助けできるか考えこんでいるという現状です。

## 同窓会名簿(昭和52年版)が残り少なくなりました。 お早めにご注文ください。

同窓会々員には、すでにご案内の通り、昭和52年12月発行の「同窓会名簿」(緑表紙)は、新たに「クラブ・サークル別名簿」と「校歌・学生歌・寮歌

記念祭歌」30編を楽譜入りで掲載し、ご好評のうちに通信販売を行つてまいりました。最近「名簿がほしいが申し込み用紙を紛失したので送つてほし

い」とのご連絡があい次いでおりますので、ここに、あらためて「同窓会名簿注文書兼振替用紙」を同封いたしましたので、これを機会にご注文下さい。学校等において現金販売は行つておりません。必ずこの注文書をご利用下さい。ご注文から到着まで、約一カ月程かかりますことをお含みおき下さい。

# 不定立の時代に

三善 晃  
(一期)

旧制のどんじり近く、新制のとつばな、という私たちの学年は、今考えるとメグマレていたかもしれん。学内的には旧制の自由と新制の自由の違い、学外的には(と言つても、学内でもそれを知るわけだが)戦時下と終戦後の違いが、旧制尋1年から新制3年までの6年間に、いやでも実感できたわけだから。

戦争末期の尋1年生にとつて、旧制府立は、精神的には自由な場所だった。東洋のイートンだったかどうかは知らんが一億総発狂、全土火だるま、お先マックラのあの時代にしては、かなり、個人の中に価値観の基軸を認めていたフシがある。教練やら家屋の強制取り壊しやら、やらされたにしても、私たちが個々に本を読んだり話したりするのに――要するに、普通に暮してゆくのに、別になんの規制も強制もなかったのだから。

教授陣も、私たちが共には勿体ないくらいの大物もいて、あの時期に、学問の重さみたいなものは、感覚的に与えられたように思う。その後の自由は、どちらかと言えば、混乱と低迷に近いものだった。教師にも、当時流行りの言葉で言えば「背骨」を失って、妙に生徒に迎合的になるなど、影の薄くなった御仁もいた。

あの時代の十代は、大人たちの権威喪失を見せつけられて、いやでも、自分自身と考えてゆかねばならなかったが、その自分のより所をどこに求めたらよいか、安逸と変動の世相に流されながら、個々には疑心、不安、焦りを持っていた筈である。そう考えると、様相は違つて

も、十代の孤別化と座標軸の不定立は、今日も続いていることになる。

私たちは、互いの内包を未熟な表現で交し合つたりしていたが、それは多分に滑稽な「真意」の無駄使いに過ぎなかった。ジャズやダンスを校内に持ち込んだ私たちの陽気な異端も、今思うと不安定な悲調を帯びてくる。そんな中で「背骨」を失わなかった幾人かの先生の存在を、私たちがなれば本能的に選別し、そのたつた一言の言葉を大事な浮標として持ちつづけたケースもあつたらう。

私にとつては、萱本先生がそういう存在だった。尋2の時の担任だった先生と、その後卒業まで、それほど多くのお話を伺つたわけではない。実は尋1の国語の授業で、私の思い上つた非礼を叱り、時間中、立たせて下さつた先生の厳しさの奥に、私は人間として貴重なものを、従つて暖かいものを感じた。

先生は時代相のうつろいには関わりなく、終始、独自の確固とした態度で周囲を見ていらしたから、時にはそれが学内の風潮から離れた異和と見られたこともあつたらう。が、それは私には先生の人間存在の自在な表現であると同時に世界への痛烈なクリティクであるように思われた。

高3の卒業時、成績劣悪であつた私に、先生が一言、「お前はよからう、元気でやれ」と仰言つて下さつた、新校舎の、寒い廊下を忘れることができな。一文を書くとすれば、まだ直接には申し上げていないこのお札を、心からの、人生のお札をここで申し述べさせていたきたい。

(桐朋学園大学学長)

# 旧から新への流れの中で

松根 敦子  
(二期)

燃えあがる炎。青春が爆発するファイア・ストーム。響きわたる「ああ西山」「見よや、ローマ」。これは昭和23年秋、私が都立に入る前年の記念祭です。新制高校開校の年とは云え、白線入りの帽子にマント姿が圧倒的に多く、男つぼさがあたり一杯でした。この夜は、女に生まれてしまったのを悲しく思い、後に女性都立の校歌を歌うようになるなど想像もしませんでした。

私の父は都立の前身である府立高校時代から16年間英語を教え、主人も旧制都立出身のため、私は昔から都立を見、女であるがゆえに望むべくもない憧れを抱き続けていたのです。それが学制改革により、昭和24年から都立も女子を受け入れる事になり、私も新制都立高校女子1期生20名の中の一人として、めでたく入学しました。都立にとつての歴史的男女共学のスタートです。が、新高の校舎とて無く、まして女子用の設備など皆無の状態。入学直後の身体検査も体育館で私達は、たまにはお料理をつくつて男性に食べてほしいと、しおらしき願いも持ちました。が、それも夢。(ああ、助かつたと云う殿方の声が聞こえます)一番問題だったのは、20名の女子を分散しては可哀想との学校側の配慮からか、男子のみの組が二組、男女組が二組というクラス編成の事でした。男女組の男子から「女子と一語では勉強がしにくい」との不満も出ました。中には女子にカッコつけるため、以前より勉強した方もあつたとか。男女の机の間がいやに広くあいていたの

を憶えています。いずれにせよ、学校も男女生徒も初体験ゆえ、戸惑うばかり。無理ありません。「七才にして、席を同じうせず」で来た者同士が、急に、しかも互に異性に関心を持ちはじめた年令になつて「席を同じうする」事になつたのですから。翌年からは各組に女子が分かれ、完全な共学になりました。

女子入学という型の上での大きな変化はあつたものの、都立に戦前から流れていた「自由と自治」の精神は不変でした。これには生徒の陰になり日向になりして我々の自由な行動を支えて下さつた今は亡き小笠原校長先生のお力が大であつたと思ひます。各部ともその精神の元に活発な活動をしました。今の言葉で云うなら「翔んでた」と云う事になるのでしようか。何しろ全ての点で、オトナの人が多いのに驚き、数多の素晴らしい個性がキラ／＼と光り輝いていたのが大変印象的でした。

今私は、点字の仕事に携つています。人間は人によつて生かされているのを、つくづく感じ、点訳本の作成・点訳者養成・視覚障害者への点字の指導等に明け暮れています。が、考えてみると、これも共学の都立で学んだ事により、女がとかく落ち入りがちな近視眼的ものの見方でなく、広い視野に立つて社会を見つめる人間になれた結果と感謝しています。

多感な頃を栄えある都立で過し、素晴らしい友人にめぐり逢えた事を、私の人生にとつての宝と思つています。

# 「学ぶ者」と「教育される者」

伊藤 酒造雄  
(3期)

人は学ばなくとも生きることが出来る。学ばない者のほうが学んだ者より有能で、誠実であることは珍らしくない。ことに、学校で教えることはほとんど実人生を生きたるための助けにはならない。学問を志す者にとっては、学校で教える程度の知識内容では全く不十分である。

イワン・イリッチは「脱学校の社会」の中で、学校という制度が教育のために如何に非効率で不経済であり、しかも非人間的であるかを見事に論証している。ことに、最近の日本のように、学校が教育の場ではなくテスト、(ふるい分けと順位づけ)の場と化してしまつた国では、イリッチの指摘はほとんど百パーセント適合する。

元来、人が人を教育しようとする場合には、前者に、後者を利用しようという意図が必ずある。それは、人が馬や犬を調教しようという場合と本質的に異ならない。現代の親の多くが子供を「教育」しようとするのも、親の側に子供に期待するところがあるからにはかならない。

「学ぶ」ということと「教育」とは違う。「教育」されることを拒否して真に「学ぶ」ことを欲する者は、必要悪としての学校を仮りの宿と心得、自らの意志と力で勉強すべきである。その際、「教育者」ではなく「学びの先達」として崇むに足る教師が、その学校にいないとは限らない。たまたま読みたかと思つていた本が、学校の図書館にないとは限らない。学ぶことに疲れた時、互いに慰め合える友が周囲にいないとは限らない……。

都立大付属高には、幸いなことに、もう一つ重要な「資源」がある。それは、この学校の誇るいくつかの伝統である。

この学校の学びの伝統は、旧制高等学校から受け継いだものであり、遠くヨーロッパにその淵源を発している。第二次大戦後、アメリカから強制的に輸入された、いわゆる新制の学校の学び方と、このヨーロッパ流の学び方との根本的な相違は、一言で言えば旧制のそれはエリート(の学び方であり、新制のそれは大衆向の学び方(調教の方式))である、ということになる。

明治維新以来、日本の社会を動かすエリートは世襲の貴族階級ではなく、所定の学歴と国家試験による資格を得た者である。ヨーロッパの一流校が貴族の養成機関であつたように、日本の旧制高校はエリート官僚のための教養過程であつた。旧制の学校制度は、しかし、戦争犯罪人としてのエリートを生み出したばかりでなく、幾多の偉大な学者、思想家をも生んだことを忘れるわけにはいかない。

戦後の新制の学校制度の中で育つた世代にあつても、現在、真に知的エリートと呼ばれるべき俊才は、私の知る限り、実は旧制高校流の学び方で一貫して来た人たちばかりである。換言すれば、新制の学校制度という障碍にめげず、自らの意志と力で学んで来た人たちである。幸い、都立大付属高には、ヨーロッパ流の学びの伝統と、すぐれた学びの先達と、大学と共通の大きな図書館がある。後輩諸君の健闘を祈るばかりである。

(依 博覧堂)

# きずな

加藤 玲子  
(5期)

5期生の通つてきた小学校、中学校時代は、まぎれもなく、戦いと、それにもなうさまじく混乱のうずの中にあつた。高校に入学して、やっとまともな「学校生活」が営めたのだ。

それは、豊かな三年間だつた。全校の生徒数が少なかったのが幸いしたのかも知れないが、一年から三年までクラスの編成変えもなかったし、C組の担任が、多和先生から小松先生になられた他は、A組は町野先生、B組は滝本先生に、三年間ずっと担任としてのご指導をうけた。多感な時代、同じクラスで過した年月は、それだけのクラスごとにおたがいの「きずな」をより強く結んだ。

\* \* \*

師にも恵まれた。小笠原校長をはじめ私たちは、先生を尊敬し、心から慕つた。それは、なれなれしく近づけるものではなかったが、修学旅行で、記念祭で、ひときわ声を大にして、手拍子をうちながらうたわれた「数えうた」の中にもみられる。5期生はこの春、卒業以来、はじめて同期会をひらいた。九十人ほどの同期生と恩師をかこんでのひとときは、こよなくたのしいものであつたが、すでに他界された何人かの先生方を偲んだとき、やり場のない淋しさにおそわれた。先生方には、いつまでもお元気でいらしていただきたいと、恩をお返しすることも出来ないま、ひたすら願う。

先輩からうけたあたたかい指導も、忘れられない。おもに、クラブ活動を通じてのふれあいであつたが、その惜しみな

く与えられた数々は在校生に大きな影響をおよぼした。心から感謝したい。

\* \* \*

当時、旧制高校時代のなごりが、そこにあつた。師の姿に、先輩の言動に、私たちはその気風をみた。都立大付属高校の歴史は、たつた数年しか経ていなかったのに、大きな「かいな」を抱かれています。大きな「かいな」を抱かれています。言葉でつたえられたものではない。それが学校のもつていた、当時の「伝統」だつたのだろう。

個性の強い人が多かつた。というより校風が個性をゆたかにはぐくんできたのかも知れない。学びの場で、クラブ活動で、沼津の牛臥の海辺で、個性と個性がはげしくぶつかり、そして育つた。

自由にものを考え、自由に行動したがおのずと、そこに「けじめ」があつた。たのしいことも、苦しいことも、悲しいこともあつたにちがいないのだが、その高校生活の、ひとこまひとこまが、一種のさわやかさをもつて思い出されるのは、何とすばらしいことか。

\* \* \*

年を重ねるにしたがつて、一年々、ただ時が流れていく感が深い、あの高校生活の三年間は、5期生のそれだけの人生の歩みのなかで、くつきりと彩られているにちがいない。

「たて」と「よこ」のきずなで5期生は、しっかりと結ばれ、育つた。誇りにたる高校であつた。ゆたかな、三年間であつた。

# ツキモノは落ちない

長井 康平  
(6期)

あの三年間は長い「通過儀礼」というようなものではなかったかと思う。大人になり、共同体の一員になるために通らねばならない試練。南太平洋のある島では、長いツタの一方の端を崖上にしぼりつけ、他方の端で若者の両足首をしぼる。若者は崖から身を投じる。頭から地面へ激突する直前、ツタが肉体を支える。精神的緊張で場合によっては気がふれる。

都立へ入る直前にスターリンが死んだ。その後の「平和運動」はソ連の「平和攻勢」とからんでいたから、スターリンの死は無縁ではない。松川裁判、三鷹判決があった。破防法成立、自衛隊誕生の「反動化」が進んだ。静岡県で不正選挙を告発した女子高生への「村八分事件」がくすぶっていたのを覚えている。

わが教室では、受験のための男女別授業編成が、はじめに一教師の手で試みられた。社研、新聞部、わだつみ会を経験し、焦燥感から、非合法と自分たちは思っていたのだが、体育館二階わきの密室を使った集まりにも通った。

一方で、何の屈託もなく(と見えたのだが)運動部にいたり、楽しみに着実に勉強している級友たちが別世界にいるように見えた。「青春」は彼らの側にあるようで、思想のとりこになってひねこびている自分がうとましかった。

だが、授業から何も感じなかったわけではない。Oさん(先生とはよばなかったなあ)の「ペーター・カーメンチント」と鼻にかかった発声の「車輪の下」はみずみずしく、Mさんのギリシャ神話ダイ

ジェスト版の英語に夢は広がった。Oさんの万葉集に、足元のさわらびの力強さを知った。Kさんの弁証法的唯物論の話は、世界を明快に切る切り口に驚嘆した。社会は複雑怪奇である。跳び込んだ仕事場は対等な人間関係があり、民主的言論があろう、と何となく予想していたのに、与えられたのは徒弟の身分……。

徒弟といえは、田舎の小学生のころ、学校帰りに道草を食ったカジ屋や石屋で目にするのができた。石屋では墓石をつくる。石材に水をかけては磨きをかけて徒弟。石にノミをあてている親方が時々来てはのぞく。徒弟の頭を無言でグイと小突き、自分でやってみせる。徒弟はまた無表情に単調な作業を続ける。小突かれた前と後では何も変わっていないのだが……。かたわらのつやつやした完成品がすべてを物語る。

通過儀礼の体験は、四半世紀たった今でも痕跡をとどめている。あのころの精神的緊張はいっつも思い出しても悪夢だ。徒弟時代の屈辱も……あぶら汗がにじむ。

だが、あの憑依の状態にあった時、屈辱の時、自分の心と体を投じた対象——正統的でなく、異端とされ、邪教として排除されるありとあらゆるものへの共感、止むことがない。

世はなんと邪に満ちて豊かなのだろうか。これこそ正統と信ずるものを頂点にすえて、残り全部をタテ系列に従えようとする発想の貧しさよ。ツキモノは落ちてくれないのだ。

(朝日新聞社)

# 忘れられない三つの言葉

須田 大春  
(8期)

最近はやりの「インタビュー用語」に「あなたにとって△△とは何ですか」というのがある。実際にぶつけられると困惑することが多いのだが、△△というのが何であるかは、主体によってちがっていることを認めている点で好感がもてる。そこで、私にとって都立とは何であるかを考えてみると、乾杯の歌で歌った「希望の揺り籠、心の故郷」というのが、多少甘ったるい感はあるがほぼあてはまるようである。

私が都立に入学したのは一九五五年四月であった。その年の暮に、恒例の講演会に一橋大学学長で、今は亡き上原専六先生を迎え、寒い講堂で全校生徒がお話を聞いた。その時の言葉のなかで一九五五年は、バンドンでアジア・アフリカ会議が開かれた年として世界史に記憶されるべきである。年の暮に忘年会をするのではなく、世界史の中に生きる者として、忘年会をしようというのがあった。今から振り返ってみても、この指摘は正確である。55年から56年にかけて、バンドン会議の他に、スターリン批判、ハンガリー事件、等があり、戦後の米ソ冷戦の構造が大きく変っていった。日本でも戦後政治の象徴であった吉田茂が退陣し、社会党の左右統一、自由党と民主党の合同による自民党の誕生、六全協による宮本共産党の成立など現在の日本の政治の枠組をきめるような出来事が続いた。

二年生になった5月、小選挙区法と教育三法をめぐって延長国会が混乱している時、都立の自治会も生徒大会を開いて

教育三法に反対を決議し、国会デモに参加した。私にとっては、それ以来61年5月まで(受験の一年を除いて)5年間続いた「デモの季節」の始まりであった。自治委員長となった秋の記念祭に、当時の全学連書記長高野秀夫氏を招いて講演をお願いした。高野氏は、当時流行していた「幸せの歌」をとり上げてこれを情緒的一貫性の歌として退け、論理的一貫性を大事にしようと呼びかけた。これは当時の全学連の中での対立に根ざしたもので、後に新左翼とか過激派とか呼ばれるようになる勢力の母体となった全学連主流派と対峙する圧倒的少数派(百対二といわれていた)の姿勢であった。これ以降、私自身もこの少数派に組することになり、59年の全学連大会には、東大教養学部自治会の副委員長として出席した。

授業中の言葉にも忘れられないものがある。松先生は世界史の最初の授業で黒板に自我の確立と大書された。高校の授業が単に知識を得て記憶するものではないことを熱く語ってくれたことは記憶に新しい。

私は、いま不惑の年を前にして、大いに思い、17年間の大企業勤務に別れを告げて、単騎で競争社会に乗り込もうとしている。このときにあたって、物理的な武器となるのは、企業で17年の間に得た機械、電子、制御、情報等の分野での身については、上原先生、高野先輩、松先生などのことばによって培われた都立時代の不羈の精神である。

(ナイス)

# 20年後に振り返って

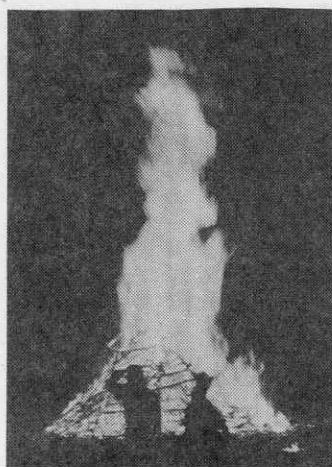
松本寿子(旧姓田代)

(12期)

突然原稿の依頼を受け「自由と自治」とか「真理の探求」とか都立の頃よく使った言葉も、しばらくの間不在だった事に気づき少々困惑しています。

卒業後私は殆んど都立の生徒にじかに触れる機会はなかったし、縦の関係も薄い今、一般的な高校生の心意気の変遷は理解できても都立の姿だけは、二十年前と変りない姿で頭に描かれていて、変身したのであろう姿は、殆んど知らない。

かつて私が身近に接していた高校では、生徒会があつたが生徒総会なるものは一度もなかった。教師の意識が統一できず、また力不足であつた事も事実だがもつとショックだったのは、生徒自身がそれを望まなかつたという事実である。彼等は満足な学園生活だとは少しも思っていないのだが、どんな学園生活を望んでいるのか、何が不満なのかを少しも表に出して語りたがらなかった。きびしい規約の中で(受験とは別に)週のうちの五日半を過し、休日には、水を得た魚のようにに全く別の世界で発散させて、再び学校へ戻ることの繰り返しの中で、再び自治だ、自由だ、真理とは、という問い



かけは、ただただわずらわしかったようである。それは私には今わかるような気がしている。

都立の頃には、世の中全体に衝激的な事件の多い中で、ある意味で盛り上がる中で、自分が力一杯主張しても、またもとの場にもどれる安心感があつたように思う。それがどんな意味を持つ発言でも、友人が、先輩が、教師がどこか一点でも支えてくれる場があつたのだと思う。でもこの彼等にはなかった。きわ立つた発言(思想的にでなくても、その時のとっぷりとひたつた生活から脱出しようとするものがきでさえも)も、その支える一点が確実でないために自分で思考のワクを作りその中でしか考えられないような仕組がいつの間にかでき上つて彼等はいらだつ。このいら立ちが教師には、手のとどかない生活の発散になっていったのだと思う。

創立四五年も迎えているのに彼等の生活の中には、形として受けついでいるものは何一つない。形として残されていながらもに精神の受け継ぎはできない。当時よく使っていた伝統という言葉は、記念祭の炎に象徴される強い縦の関係、自治を守ろうとする力、真理を求める心だと思ひ込んでいたが、その時感じた言葉では表現しにくい「一年間のすべての思いをそこにぶつける」といった呼吸の乱れをなつかしく思い出して、機会があれば、スクラムの輪に入りたと思う。でもこの彼等の多くは、恐らく二度と振り返りたくない思いがあるだろうと思

# 三年目と六年目と

現職員 豊田 文雄

(19期)

思いがけず母校の教壇に立つようになつて三年目になります。生徒としての生活を合算すれば六年目というわけです。

ちょうど12歳年下の生徒を担任することになるとは、かつて予想だにしませんでした。自分が生徒として接した先生方と現在の生徒の双方の狭間に位置してみても、自分の存在のきこちなさを感じるこ

とが幾度かありました。生徒をみる自分が教師でありながら、一方で生徒の姿にかつての自分を重ねあわせてしまうことにその原因があるように思います。

たとえば、「最近の生徒は……」という具合に話が始まると、「僕は最近の生徒の部類なのだろうか、それとも……」などと一人で考えていたりします。そして多

う。高校生活のあり方や、一般的な思想の傾向は時代によつて、あるいは教育方針により確かに変わる。変つて当然なのだけれど、その中にもいつも社会の不正に對しての怒りとか、自分に対する情熱を失わないことを、具体的な形を通して伝えるのが伝統のよさであると思う。私が二十年前をなつかしく思うのと、振り返りたくもないと思う彼等との違いが一体何なのかを知りたいと思う。もし世の中の変遷であるならばそれは我々を含めて先輩の責任だと責められて当然だと思ふ。都立の伝統は良いものだと始めから反論の余地なく愛着を感じて受け継いだはずの自分が二十年の間に歩んできた道を振り返つた時、あの時のまに私にとつ

くの場合、「最近の生徒」談義では生徒の味方になつている自分に気がつきます。というよりは、僕自身がまぎれもなく「最近の生徒」の一人だったのであつて、今の生徒は僕よりもストレートに自分を表現しているにすぎないと思うのです。このように本校六年目の自分を意識したりするのですが、いつもそれではやっていけない自分でもあることを否応なしに思い知らされることもあります。当然のことながら、生徒が教師に對して抱く不信や親しみや秘密はそのまま僕にも向けられるわけで、それは「生徒ぶつて」いる自分を打ちのめす効果を十分にもつてい

るのです。この効果はこれからも威力を増すことはあつても弱まることはまずなさそうに気がします。て陶酔であり錯角でもあつたのではないかと思つてみた。それを踏み台にして社会と対面する姿勢が年々消えてゆくような気がした時、あの時スクラムを組んでながめた炎は、本ものの伝統が少しずつ欠けてその部分を形だけが埋めている、そんな炎にはじめていたのではないかと思つてみた。彼等は私が都立にいる頃に生れ育つてきた。だから私達が直接育ててきた子供ではない。でも今私は、生れたばかりの赤ん坊を自分の手で育て始めてもう〇年にもなつてゐる。この子供達が迎える高校生活、青春とは、私達がどんな中年を過し、老年を迎えるかという事ではないだろうか。

# 授業について

金子 修一  
(18期)

現在私は高知で教鞭をとっており、日頃学生と接している。そうした人間が学生生活を振り返るとなると、自分の頃はこうだった、という自慢話になりがちである。そこで、以下都高在学中に感じたことを、なるべく一般化した形で記すように努めてみた。

\* \* \*

都高の長所は種々挙げられるが、私にとってかけがえもなく貴重であったのは、先生方が一人一人自分の研究対象をもち、研究者としての経験を生かしながら教科教育に努力されていることだった。よく勉強されていることは勿論のこと、授業も詰め込み式ではなく、なぜそう言えるのか、なぜそうなるのか、という点から論理を組み立ててゆくものが多かった。自分が教師になってみると、論理展開を明らかにしてゆく授業がいかに大切であり、またいかに大変であるか、身にしみて感じられる。そうした授業は一朝一夕にできるものではなく、また単にそれだけの分野の最新成果を呼取していくだけで可能となるものでもない。これも、諸先生方が、それぞれ未知の問題を抱えつつ勉強してゆく、研究者としての面を持っていたからこそ行ない得たのであり、教師の専門家としての一面を大切にすると、雰囲気や都高全体が持っていたからこそ、可能となったのである。その体験から、優れた研究者が優れた教師でないことはあり得ようが、優れた教師は優れた研究者でなければならぬ、というのは私の信念となった。現在の私はその信念から

程遠い位置にいるが、都高から受けた学恩をいつかは今の学生たちに返してゆきたい、と念じている次第である。

\* \* \*

最近の大学生が勉強をしようとしないう、本を読まない、とはよく言われることである。私の乏しい経験でもその点は否定できないが、私の見る所、勉強したくても仕方の判らないこと、本を読みたくてもどこから読んでいいか判らないこと、入学前までの人生経験が平板なため、読んでも深い共感を持っていないこと、に問題があるようである。学園も社会の縮図であり、これらの原因をすべて受験教育に押しつけてしまふのは問題であろう。それでも、学生の多くが、一月単位、一週間単位の受験勉強に慣れてしまい、勉強とはあてがい扶持でやるものだ、という感覚を身につけてしまったとは言えそうである。その点、私達が都高で受けてきた教育は、大学入学という入口だけのものではない、もつと先を見た教育であったと言える。勿論、私達の頃に問題がなかったわけではないが、大学に入ってから、或いは実社会に出てから、自発的に勉強していく姿勢（それらは応用がきく）を身につけることは容易ではない。受験教育をのり越え自発性を身につけさせる教育とは、言うは易く行なうは難く、そうした教育が都高でも種々の理由から困難になっていることは仄聞する。しかし、中に入ってしまうと不用となる「門を叩く石」とならない教育を、たとえ困難であつても続けて頂きたいと思う。

(高知大学人文学部講師)

# 都高バカ

太田 洋  
(20期)

30周年記念の会報に私のような者が寄稿するチャンスを与えられることとなったのは、私が真性の「都高バカ」であることがどこからか漏れたに違いない。私は今まで一度も総会に出席したことはないし、役員の方のおつきあひもないし、できればこの事実はいつまでも秘密にしておこうと思っていた。しかし、実際に寄稿依頼が来ては仕方ない。仕事に疲れた体にムチ打ち、ウイスキーの力を借りて、その「都高バカ」の実体を告白するほかない。

今思えば、昭和42年に都高に入学したときに齋正子先生が担任になられたことが私の一生を変えてしまったと思う。15歳の多感な少年にとつて、齋先生の府立高校尋常科における教育型態を基盤とした教育理念は、ほとんど決定的であつた。余談だが、齋先生の理念があれほど自然な形で私の中に入り込んだことと、あの旧制の匂いを残したカビくさい木造校舎とは無関係ではないと思う。現在の鉄筋校舎で学ぶ生徒がはたして容易に齋先生の理念を理解できるものかどうかは疑問だ。

閑話休題。私は黒羽清隆先生の日本史を除いてほとんど試験勉強もせず（この点は齋理念の曲解）、記念祭執行部の活動に打ちこみ、古川原先生をアドバイザーとした教育問題研究会を企画することに熱中し（まさかこの経験が就職して生かせるとは思わなかった）、その後高校紛争の渦に巻き込まれ（その時は半月ほど休校になってしまい、浅野満君らとICC

で昼は山、夜は酒の共同生活をしたことが懐しい）、気がついたら放心状態で大学生になっていた。

その時の私は、大げさに言えば人生の大半が終わってしまったような、これからは余生だというような気分になっていた。私は訳あって2つの大学を経験したが、いずれに於いても自分の学校という意識は全くなく、いわんや愛校心などゼロで、大学はパンの為の学問を金で買ひ、麻雀のメンツを集める場ぐらいに思っていた。だから、今でも私はそれらの大学の卒業生だとは思っていないし、同窓会費も払っていない。多くの人はこんなことを聞くと、何とバカなヤツだ、何と不幸なヤツだ、と思うかもしれない。しかし、だからこそ真性の「都高バカ」なのである。

あの3年間は、私のつまらぬ人生にとつての最初のシュトゥルム・ウント・ドラングであり、そして多分もう二度とないだろうという予感がする。

卒業してから8年半が過ぎた。当時片思いをした女の子は既に人妻となり、一緒に記念祭執行部をやった仲間の大半も世帯を持ってしまった。私は法学部出身なのに何の因果か、現在教育委員会という職場で毎日恥かしげもなく指導主事を相手に教育論を闘わしている。しかし、私は絶対負けたくない（と勝手に思っている）。何故なら、現代のいかなる教育問題についても、あの3年間の経験から解答が出ない問題はないのだから。

(神奈川県教育庁)

# 歴史の授業の思い出

安田 晶彦  
(23期)

高校時代のでき事と言えば、凡そ数えきれないくらいあるのだが、ここでは、思い出深い歴史の授業のことなど取り上げてみようと思う。

二年に進級して、私達は世界史の授業を受けることになった。その時、私達のクラスを担当して下さった先生は、三木巨先生であった。最初の授業で、先生は「まず、世界の歴史を図に示します。」とおっしゃられて、複雑な図を黒板一杯に書かれ始めた。その図は、古代史における、エジプト、オリエントを中心とした地域的な歴史の相互関係を示すもので、その後幾度か、そうした図を黒板に示された。先生は、世界の歴史を包括的に把握することを、私達に教えて下さった。

三木先生は特に、アラビア史に関しては第一級の研究者でいらしたので、折りにふれて、私達が初めて聞くような、アラブの風土、アラビア人の生活、イスラム教などについて、興味深く講義して下さった。今でこそ、オイル・マネーの動向が、ユーロカレンシーの鍵を握り、我が国でも、アラブ向けプラントの輸出に躍起になっている時代だが、当時先生が「今にアラブの地位が世界的に見直される。」と説かれていたのは、全く先生の卓見であったと信じている。三木先生は、私達の三年進級時に、東京外語大へ栄転された。

私達は三年になり、日本史の授業を受けることになった。私達のクラスを担当して下さったのは、黒羽清隆先生である。先生は授業の中で常に、特定の人物を巡

る歴史だけではなく、庶民の歴史というものも強調されていた。先生の御言葉によれば、「その時、田吾作や権兵衛は、何を思い、どのような生活をしていったかが、問題だったのである。」

また、黒羽先生が心掛けていらしたのは、歴史学上の定説を越えて、論争中の学説にも触れることによって、私達の日本史に対する興味を起こすことであった。その為に、時には論争のあったテーマに関する諸説のエッセンスを、分かり易く解説して下さったり、さらに興味を持った生徒達の為に参考文献を紹介して下さったりした。先生は、私達が卒業して後に、学芸大附属高に栄転されたと聞いている。当時からNHK教育テレビの通信高校講座の講師をお勧めになっておられて、最近も先生の鮮やかな講義を拝聴しては、懐かしく思っている次第である。

都立大附属高には、当時他にも尊敬すべき先生が大勢おられたし、その後も、優秀な先生をお迎えしていると思うが、紙数も尽きたので、また何れかのことにしたい。

諸先生方の御活躍を祈りつつ、筆をおくことにする。  
(慶応大学大学院在)

# 「自由」はどこにあるのか

神谷 純  
(24期)

夕刊の記事に都大付三年の女子が自殺したとあった。この原稿の催促があつて筆をとろうとした直前のことだった。

残念な話だ。我々の同期生の中にも受験期に自殺した女の子があつたという。

そして僕はまた、この夏に死んでいった親戚の女の子を思いうかべた。彼女は学区こそ異なるが、やはり都高のような都立高から推薦入学で僕と同じ大学に来ていた。しかし、彼女にとって入学は受験の終りではなかった。むしろ受験の洗礼を受けぬがゆえの悩みが始まったのだ。彼女はノイローゼに陥り、衰弱死してしまつた。なんともあつけない死であつた。二十前だった。

一流校へ激しく流れてゆこうとする受験気流と、その対極にある無風地帯の都立高との急激な落差の間に彼女たちは引きさかれてしまつたのだろうか。

死んでいった者たちの気持は外から推測する他ないが、自分や周囲の状況に対して、もう少し余裕や寛容さをもつていたら死の淵へと転落してゆくこともなかつたろうにと思われる。

そして都高は、他の都立校同様、受験とのギャップをかかえる一方、柔軟な精神を養う氣質を持つていたはずである。ふり返ってみると、僕にとって自分や他人の自由な存り方を許せるようになれた場こそが都高であつた。

大学に入学してから実感したのだが、よほど都高の方が解放的であつた。受験名門校から屈折した心をかかえてやってくる者たちの集まるキャンパスに自由奔

放きはない。

都高では待つていても草木を一勢に同じ方向になびかせる風など吹かない。風を起こすには自分が動くしかない。

そして悲劇は、都立高全体の沈滞が、この独自の不干渉の中で培養されてゆくことにあつた。ただでさえ風が吹かないのに風を待つ人ばかり増えては沈滞が極みに達するのは当然のことであつた。

悲劇はまた、都高に始まつた自由の道が受験を境に断ち切られているかのように見えたことであつた。

実際、受験を通過し、大学に入つても管理化に歯がゆさを感じたのだが、よく考えてみれば「道」は外にあつて断ち切られてしまうものではなく、我々の内側に成長してゆくべきものであつた。

現在の都高がどうなつていくかは知らない、聞くところによると管理化が進んでいるという話もある。しかし、細々とながらも伝統は生き長らえているのではないか。都高に入りながら、自らの内に自由さ、柔軟さを取り入れそなつた、というのには残念な話だと思ふ。

僕にとつても受験の後遺症は大きかつた意味の定型化、画一化の押しつけによつてしびれかかった心の柔軟性を内側からほぐしてゆくのは、都高時代にとり入れた内なる自由である。

内なる自由は、外的状況と自己との対応関係を柔軟に改革してゆく原動力となるものであると、僕は信ずる。

(早稲田大学法学部在)



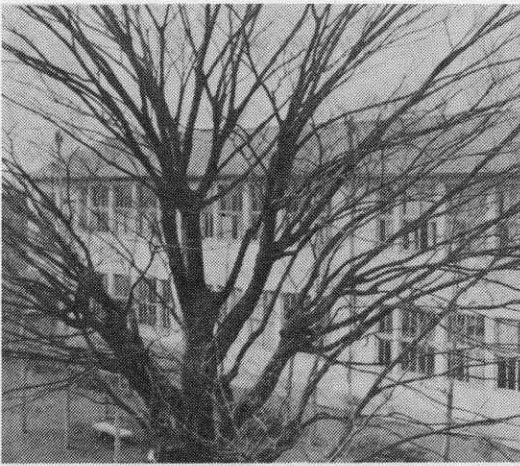
# 私のふるさと

名古屋澄子 (26期)

私は、一九七三年に都立大学附属高校に入学しました。その頃世間では、私たちの世代を、三無主義とかシラケ世代と評していました。けれど私たちはそれほど無気力でもなく、シラケていませんでした。

都高での三年間、私の全エネルギーは高校の中で燃焼しました。時間的にも、そして精神的にも。

所属していた生物部では、ネズミを使って洗剤の害を調べました。あまりに大きな問題に取り組んだので、甚だインチキな研究になってしまいました。社会的な問題に少しでも首を突っ込みたいという気持ちがあったのです。また、記念祭に向けて、連帯とは何かを議論したり定期テスト復活に際しては、学問とは何かというような話を話し合いました。都高には、討論のできる条件が揃っていました。先生方は生徒の人格を認め、



頭ごなしに、何かを強制する事がありました。そして、男子学生が女子学生を差別する事がありました。私たちは自由でしたが、その自由を十分に生かす事ができませんでした。

放課後にホームルームの話し合いの続きをする事がありました。クラス全員が集まる事は、まずありませんでした。放課後の討論会が3日も続くと、出席者は5〜6人になってしまふのです。そうになると、討論は進展せず、皆で溜め息をついてその場に坐り込むのが常でした。記念祭やクラスマッチの執行部選出などの時も、出席者が少ないという事は変わりませんでした。また、クラブ活動をしている人も少数でした。

数人の友人とは討論しても、それを学校全体に訴える事がなく、さらに学外に訴える事など考えられませんでした。自治会がなかった事は象徴的です。

討論が進展せず坐り込む時、私たちにとって自由は重たいものでした。けれどその停滞の中で、広く連帯し得ない自分たちの弱さを思い知る事ができました。先生が干渉し、無理に生徒会を作ったのでは、問題は何も見えなかったでしょう。

多くの人々と討論し、多くの人と連帯して活動する事ができないのは、現在の私も変わりません。その原因を考える時、高校時代を振りかえる事が必要になります。私にとって都高は、ふるさとです。現在の問題を考える時、振りかえらねばならないふるさとです。

(法政大学文学部生)

## 御師一年表

(敬称略・アンダーラインは故人)

年度	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	
校長	森脇大五郎				小笠原録雄																											
教頭																																
国語																																
社会																																
数学																																
理科																																
保健体育																																
芸術																																
英語																																
事務長																																
司書																																
養護																																

# 都立の自由と自治を語る。

昭和53年11月10日 午後7時～9時  
母校々長室にて

## 出席者（敬称略）

- 小林行昌（1期） 明石印刷株式会社専務取締役
- 小中陽太郎（4期） 作家 近著に「信じられない奴の人間学」青春出版、「エヴァの日記」翻訳・時事通信がある
- 吉原健一郎（7期） 東京都公文書館
- 原田礼介（10期） 日本長期信用銀行事務部電子計算室副長
- 猪熊建夫（13期） 毎日新聞社経済部
- 北村 創（16期） 横浜市立大学医学部講師
- 大石 進（19期） 東京都立大学工学部機械工学科助手
- 金子正美（22期） 新宿区立中落合区民福祉会館
- 鈴木一代（25期） 上智大学文学部社会福祉学科4年在学
- 司会 小中陽太郎

司会 きょうは「都立の自由と自治」というテーマで話し合ってください。

私は新制高校の4期生ですが、男女共学でもありましたし、自分たちで新聞を出したり、研究活動もして、戦後の民主主義が、曲りなりにもあったと思うのです。そして、私が学んだ教育システムが今日まで続いていると思っております。

一方、考えてみると、別の感じもあります。その第一は、私たちが受けた戦後民主主義の教育は、終戦後の一時期あつただけで、非常に特殊なものではなかったか……ということですね。

第二は、都立大学附属高校は、戦後民主主義教育を行う、全国の高校の中でもちよつと特殊な（存在）ではなかったかという思いですね。

第三は、私も在学当時、悪いことばか



りしていましたが、それ等の懐かしさとか悔恨の念も、都立の歴史の中では、特殊だったのではないかと思うのです。

私は、みなさんのお考えを伺うと同時に、私たちが受けた教育が、大きな流れの中で、どのような位置にあるのか。

それは少数派で、やがて減びてしまうものなのか——そうではなく、良い点は生かし、次の世代につけ加えられていく水脈のようなものなのか、それを是非客観化したいと思ひ、楽しみにしているわけですね。

それでは、1期の小林さんからどうぞ。

## 都立で育かれたもの

小林 「焼け跡派」という言葉がありますが、私もその一人であつたわけですね。

私が旧制の府立高等学校の尋常科——今の中学校に入学したのは、敗戦の昭和20年の春です。いま振り返ってみますと何がために入学しようとしているのか、明確な意識を全く持っておりませんでしたし、持つ余裕もなかった。とにかく、日本が、まさに死に絶えんとする寸前のことですから。

小学校六年生の時、戦火を避けて疎開をしておりましたので、将来の方向づけなど、全く考える余裕もありません。



自分が入れる中学へ進んだというにすぎません。

入学して四ヶ月で敗戦の日を迎えましたが、中には、入学後、爆撃によつて家を焼かれ、再び地方へ去つて行った者もいるわけですね。

私達が、都立大学附属高校の、第一回の卒業生になったのは、昭和23年に学校制度が新制に変わり、たまたま、われわれがその学年にいたというに過ぎません。ですから、いわゆる「都立の自由と自治」という、旧制府立の伝統が、どのような形で受け継がれて来たのか、明確ではないのです。

今になって考えてみると、記念祭の時ファイヤーストームを囲んで騒いだことなどが、強烈な思い出となって、よみがえってきますが、私などは、非常に中途

半端な都立の六年間を送ったという、自  
貢の念に耐えかねているわけです。

ただ強いというならば、同期の友達と、  
卒業してからも、いろいろな親交があり、  
いろいろな機会に会っては、現在の考え  
を交換しあつていくという場が与えられ  
たということです。

それがまた、都立の六年間で育つま  
れた自分というものを、ただ単に環境の中  
に埋没させない力となつていのだと考  
えています。

私が今でも良く覚えているのですが、  
確か始業式の時の挨拶だったと思いま  
すが、時の佐々木校長が「あなた方は、真理  
の探究に向つて学園生活を送っているが  
真理というものは非常にむずかしいも  
のだ。真理とは英語でトルースという。ト  
ルースには、大文字のトルースと小文字  
のトルースがあり、小文字のトルースは  
探求していけるものであるが、大文字の  
トルースの探求は非常にむずかしい。私  
自身でさえ、今日、それが何であるかが  
わからない。この点を頭において、有意  
義な学園生活を送ってもらいたい」と話  
された。\*旧制

私は今でも、亡くなられた佐々木校長  
のこの言葉が非常に印象に残っています。

## 学生大会の名物男『ラッコさん』

司会 私は4期生の立場でお話します。  
私はいへんよくおぼえていることがあ  
ります。入学した時に「ラッコさん」と  
いう、海の動物を思わせる不思議な人物  
があり、マントをふりかざして「社会主  
義研究会に入れ」と。つまり革命が起つ  
た時のために入れ(笑)と言つていまし

た。そして、学生大会の一番の売り  
物だったという時代でした。

このラッコさんという人が、なんとも  
楽しい人なんで、私たちは、すごくショ  
ックを受けつつ拍手をしていたんです。

たいへんな学校へ入つたものだと思  
いました。ですから、私にとつて、都立の  
自由と自治を語るとすれば、まずラッコ  
さんということになります。多少軽薄で  
多少口が達者で、しかし、やっぱり真理  
の念はあつたということですね。(笑)

僕らの時代には、これはあとになつて  
からわかることですが、初期の全学連を  
作つた方とか、早稲田の全学連の書記長  
になつた高野さんとか、全学連のよき主  
流の人がおり、その後を継いで運動に入  
つて行つた人もいます。

しかし、ここは都会の真中ですから、  
いきなり革命といわれても、本気で革命  
が起るであろうと、山に入つて火炎ビン  
を投げる程、うぶな生徒もいなかった。  
そういう意味では、自由と自治が、言  
葉として少し早く入り過ぎたために、や  
やシニカルにとらえる面があつたと思  
う。僕はその時受けたショックをいまだに  
残していて、もしかしたら、やっぱり革  
命が起るかもしれないという気持ちも、  
半分はあるわけですが、それは、よくプ  
ロレタリア小説に出て来るような、深刻  
な革命体験というより、ある種の明るさ  
のある体験だつたと思います。

もう一つは、小林先輩のときにはな  
つたんですが、私たちの時代は、初めて  
女性が入学して三年目ということもあり  
女性がめずらしくて仕方がない年令とが  
重なり、演劇とか音楽とか、男女が一緒

にやるものが、とても人気あつた。

私は三年生の時に記念祭の執行委員長  
をやつたのですが、ただ一つ誇れるもの  
は、ファイヤーも男女一緒にやらなけれ  
ばいけないと……。それまでのファイヤ  
ーは、男が突然ウォーと出て来て(笑)  
女をはじき出す集団であつた。

その頃、三笠宮がやつたフォークダン  
スはやつている時代でしたので、それ  
を取り入れ、ファイヤーの中に、ともか  
く女性も入れるという画期的なことをや  
つたわけです。

その時のファイヤーでは、卒培婆を盗  
んだり(笑)枕木を調達したりして大騒  
ぎだつたんですが、ぜひ私としては正史  
に残しておきたいと思ひまして。(笑)

## 朴歯をはいて街を歩

吉原 7期ぐらいになりますと、歌声運  
動が定着して来た時期で、校庭のプラタ  
ナスの下で、昼休みに集まり、歌を歌つ  
たりしました。

私は硬派だつたので、一緒に踊るとど  
うも照れくさくて：今の若い人は抵抗な  
いんでしようけれども、私なんかは、た  
いへん抵抗を感じたことを覚えていま

私は旧制に憧れる部分があり「朴歯」  
をはいて、腰に手ぬぐいをぶら下げて、  
都立大学の駅のあたりを歩した口なん  
ですね。

政治的な問題では、ちょうど公和条約  
以降の時代ですから、学園の雰囲気とし  
ては、まだまだ占領下の陰うつな面が少  
しは残っていましたが、民主的な運動も  
出て来ました。

何年の時でしたか、今、団地自治会の  
事務局で、よくテレビなどに出ている7  
期の岡田君を、広島の原水禁の大会へ送  
り、帰つて来た時には、先生方も含めて  
校庭で報告集会をやつたことがあります。  
今にして思えば、なつかしい青春のひ  
とこまですけれども、当時はいろいろと  
深刻ぶつたり、文学青年ぶつたりして  
ました。

私は、新聞班、わだつみ会、文研、水  
泳部、天文部、柔道部というように、あ  
らゆるクラブに顔をつつ込みましたが、  
いろいろな可能性を追求しようとするに  
は恵まれた環境というか、雰囲気をも  
な持つていたようです。

二年、三年の頃には砂川闘争があり、  
高校生の政治活動が巾広くなつていく時  
期で、今、ラッコさんの話が出ましたが  
それまでは、全体として動くというより  
ある先進的な人達が引っ張るという感じ  
があつたのですが、それがまとまつて、  
民主的な運動をやつていくという時期だ  
つたと思ひます。現在でもそうですが、  
組織的に動くとする訓練をさせられま  
した。

自由と自治といっても、責任を踏まえ  
たうえでの自由だということを論議した



こともありました。単に野放しにやるべきではないという事でした。

現在、東京都の公文書館で、歴史の編纂をしています。そういうものに興味を向けるようになったのも、やはり都立時代の貴重な体験が生きていると思います。

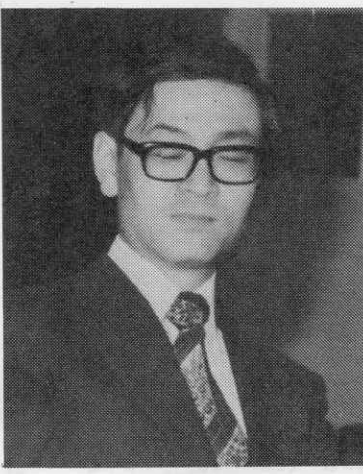
### 卒塔婆事件に賛否両論

原田 私は吉原さんと入れ違いで、35年卒業の10期生です。

「もはや戦後ではない」といわれた時代で、それほど飢餓感はなくなり、さりとて、高度成長が本格的に始まるころまで行かない、まだまだ牧歌的な環境だったと思います。

たしか一年の記念祭の時、二年生か三年生が、隣りのお寺から卒塔婆を盗んで来てファイアーにくべた(笑)。卒塔婆事件というのがあり、これに対して、校舎の間の中庭で、授業を返上して、全校集会が行われ、そこで賛否両論が出ました(笑)それが非常に印象的でした。

そんなものは取るに足らんことで、高校生の無邪気な遊びの一環として見過ごされるべきだという擁護説が一方にあり、



それに対して、非常に強硬な反対意見もあった。

それ自体が社会への甘えであり、自分たちの中から犯人をつまみ出して(笑)お寺へ代表が謝罪に行くべきであるというけじめ派の議論がありました。

それ以降いろいろ考えてみますと、私達の頃になると、自由と自治というものが、本当に自分達が必要に応じて作って行くという意識が、非常にぼけて来たのではないかという気がします。

一方では原水禁や警職法といった政治的な目標があり、その頃には、すでに全高連といった組織があったのでしょうか。大学の講堂に都内の高校の有志が集まり有力な拠点となり、大会が開かれていたが、これがまた非常に物議をかもしました。

ただそれは、やはり尖鋭的なグループが指導し、自分達の学校でそういう大会を開くんだという意気込みでやったわけですが、客観的に眺めると、その裏では名門校からの転落が進んでいたのではないかと思います。

一方の極には、自由も自治もいらななくとにかく一生懸命勉強して、ほどほどの大学へ行ければいいのだという生徒もかなりいたのではないかと思います。

その意味で、学校全体のまとまりが、はたしてあったと言えるのかどうか、ちよつと疑問に思うようなところもある。

ただ修学旅行の時、修学旅行委員を選び、自分達で勝手にコースを決め、先生には事後承諾で旅行に行くとか、記念祭も含めて、ある程度、本来の意味での自治が残っていたと思う。

私達の時、自由と自治といっても

先輩たちが残してくれた衣の中で、何をしたいのかわからなくなっているような面もあったし、一方では、非常に尖鋭化して行くグループもいたというのが、われわれの世代の特徴だったのではないかと思います。

### デモに150人。一位日比谷、二位都立

猪熊 私は13期ですから、35年に入学し38年卒業です。60年安保の年に入学したわけです。ですから、非常に政治的な印象が多く残っているし思い出もあります。

60年安保が5月6月頃で、その後岸内閣が退陣し、池田内閣の高度成長が始まるわけですが、現在と比べれば雲泥の差があります。かなりいい生活が出来たんじゃないかと思えます。

先ほどのらいのお話の延長線上にあるわけですが、自由と自治といっても、おそらく、だいぶ形骸化しており、今から思うと、身分不相応の先輩の恩恵を享受したような感じがあると思います。だから自由自由、自治自治ということは、よく言ったけれども、実力はない。

ただ旧制時代の片りんは残っていた。例えば、先程吉原さんは朴歯とおっしゃ



いました。私の頃は普通の下駄でした。現に僕も週に半分以上は下駄をはいて通学したし、それで東横線に乗れば格好いいわけだよ(笑)。私などはちよつとイキがっていたから風呂敷など持って通学してね(笑)。多少蜜カラ的な気風が残っていた。

今までにもお話に出たように、記念祭とか修学旅行とか、面白い懐かしい思い出はいっぱいあるけれども、振り返ってみると男女共学が、うまく行った学校じゃないかと思えます。

安保のときは、たしか一五〇人ぐらいがデモに行った。僕達の期から4クラスになったから、学校全体で五〇〇人の生徒のうち一五〇人も行ったのだから多いですよ。一部の雑誌によると、日比谷高校が二〇〇人、二位が都立大附属だとか(笑)。あそこの学校は政治運動が盛んで、非常に自由な学校であるという、外からの定評があり、今考えてみると、やつぱりそうだったのかなとも思う。

ただ一方では、ええ格好というか、遺産に甘えて、天ぶらのなところもかなりあった。しかも、あまり面白くない話だけれど、入試制度の重圧が、ジワジワときて、進学がちよつとつ落ちこんでいった。

勉強をあまりやりたくないの、政治活動などでごまかすというようなところもあり、かえってそれがまた、いい3年間であつたような気がします。

### 活発だった先輩との交流

北村 私達の16期は、戦後のベビーブームの影響で、一学年7クラスという特殊

な位置にあります。まあ、そのお蔭で入学できたんでしょうけども(笑)。

自由とか自治とかは、その頃も叫ばれていたのですが、われわれの時代、過度期ということが良く言われました。つまり、この時代、都立は曲がり角にあったというのには歴史的事実が証明していると思うのです。

というのは、われわれが卒業してしばらくして、例の学校紛争が起き、高校にも来にくくなった時代になるわけです。

自由と自治に関しては、私なんか、今でも謳歌したと自負しております。

それが15才の若さで、何がわかるかというところもあるかもしれませんが、そういうことを実際に言葉で言い考えて、しかも何かをやつて来たという経験は、自分の一生でも、その時しか持てなかつたということがあります。

また、われわれの時も、修学旅行は自分たちで計画し、酒も飲んだ。先生はついて来て、一緒に酒を飲んだというのも私達が最後だったのでないでしょうか。政治的には、ちょうど60年安保が終つて空白の時期だった。私は全高連の最後の委員でしたがつぶれました。最後まで



残つたのは、ちと教育大附属駒場だったんですが、先にむこうがつぶれてくれて、うちは最後まで残つたという自負を持っています。

私は在学中、政治的な意識は全くなかった。しかし、わからないなりに、そういうものを考えなければいけないのだと先輩に言われ、そこで考え、自分なりに取り組んで来たわけです。

政治的意識はまるでなかつたし、マルクスも読んだこともなかつた。しかし、今にして思えば、その頃の訓練が、ものを見る上で、ずい分役に立っているし、例の大学紛争の中でも、自分なりに間違わなくて済んだと思っております。

次に、われわれの時代で特徴的だったのは、猪熊さんなど13期や12期の先輩が多勢来て、学習会委員と称して、面倒を見てくれた。勉強もするし、都立についてもいろいろ話し合いました。

その後もずっと関係が続き、5期ぐらいにわたつてコンタクトがあり、一緒に山小屋を作つて合宿したりしています。こうして一生の友達を得られたのも、都立の校風によるものだろうと思つている。曲がり角だ、曲り角だと言われながらも、在校生が、やはり自由とか自治というのを一生懸命考えていけば、それなりにいいことではないかと思ひます。

で、そういうことをやかましく言い伝える校風を作つてくれた先輩に感謝しなければいけないんじゃないかと思ひます。

### 中止されたファイアー

大石 私は19期ですが、入学して驚いたりに気が入つたことは、先輩との交流のこ



とで、入学してすぐ、先輩がどやどや入つて来て、いろいろな歌を指導してくれました。

次の20期から学校群になつたため、ちよつと学校の様子が変つたという気がします。そして、3年生の頃から大学紛争が盛んになり、われわれの大学入試の年が、東大の入試が行われなかつた年です。私達の頃はベビーブームも過ぎ、6クラスになり、僕のクラスは、遊び好きな学生ばかりで、何かと言うと駒沢公園へ行つては、わいわいやつていたことが、よく記憶に残っています。

記念祭のファイアーが、校庭のスプリングラーの取り付けのため中止になり、枕木を運んで大がかりにやつたファイアーは、僕らが最後だったのではないでしょう。

### 封鎖に明け暗れた学園生活

金子 僕たち22期生が入学した時には全部学校群の生徒でした。私達の高校入試の発表があつたすぐその後、都立高校の卒業式の封鎖が行われた。ですから、私たちはああいう学校へ行くのかつていう感じで(笑)入学して来たんです。



入学したのは69年(昭和44年)の春ですから、僕たちの学年が一番封鎖に明け暗れた学年だと思ひます。僕たちが都立に在る間に4回ぐらい封鎖がありました。

まず入学した昭和44年9月に封鎖があり、これは青山高校の封鎖に呼応する形で行われました。この時一番叫ばれたのが、教育の犯罪性ということが言われていました。教育すること自体が、今の教育制度の中では、ひとつのレッテル貼りにつながるのではないかと……。

ちよつと9月の終り頃、後期試験の1週間ぐらい前から封鎖が行われ、定期試験が廃止されたんです。僕たちもこれにはビックリしました。

そして70年を迎えることになるのですが、60年安保の時もずいぶんデモに参加されたようですが、70年の時も、一学年6クラスのうち一五〇人ぐらいが参加したということです。

今でも覚えていますが、70年の6月23日、安保のデモの中に都高生がいたというところから、生徒の処分が行われ、処分撤回の封鎖とか、さまざまな形の封鎖が行われ、3年になって初めて封鎖のない一年を過したという具合です。

これ等一連の問題を、僕たちの間では今でも、どのように考えていいのかわからない。全体がどうだったのか結論が下せないような状況です。

70年には、自由ヶ丘や都立大学周辺で高校生が主体となって地域デモが行われたい3桁の数字の学生が参加し、71年まで続いたんですが、それ以降は、そのような政治活動が、広範に行われるということがはなくなったのではないかと思います。

ファイアーが正式に廃止されたのは僕たちが入学した69年の記念祭の時ですが2年生の秋、70年の記念祭の時には、2日目の夜、突然、非合法ファイアーをやらうとみんなが決め、日曜日にやってしまったということがありました。その後、は歌声に変わっていったんです。

そんなわけで、すごく波乱万丈の高校生活だったんですが、その中で、生徒の中の運動の継承とか、組織の継承が、だんだん行われなくなっていました。例えば自治会や校友会にしても、ほとんど上級生からの継承が行われず、何かしなくてはいけないし、やりたくてもどうやっていいのかわからないということが



ありました。

その中で、自分たちで、なんとかやって行かなくてはと、手きぐりの状態で、一から始めたものです。

僕はいま福祉の仕事をやっています。その福祉の仕事を始めようと思い、ボランティア活動をやり始めたのも、一年生から二年生にかけての時代でした。

### 廃止された定期テスト。暗い時代

鈴木 私達も学校群制度で、私はこの学校を選んだんじゃない、なぜ都立に回されたのかと思っただけです。

まず入学式のときに「やめろ！ばかやろう！」ってヤジが飛び、「ああ、こんな学校に来てしまった」って：（笑）ほんとにそのときはショックだったですね。

留年した人かもしれないが、紛争の生き残りといった人たちがいて、授業中でもドカドカと入って来て「君たちはこの学校に来たからには自由を」とか自治を：とか、そういうことを盛んに言っていました。

でも私たちは、まだ中学生気分が抜け切っていないこともあって、なんであんなに乱暴な」という印象しか受けませんでした。

それから、封鎖のことですが、高校生が大学の学長の所へ入ったというところで告訴され、その撤回のため、一カ月ぐらい、殆んど授業が行われない形で封鎖がありました。

私たちは生徒集会と言ったのですが、みんなが集って対論集会を開いていました。初めはみんな真面目に、一生懸命考えようとしたんですが、次第に、その時

間は授業が無いのだから、学校へ行かなくてもいいんだ、休みなんだという気持ちに、半分以上の学生がなっていたと思います。

私たちは、政治活動をする人は一部の人という感じで見てしまっただけで、あまりみんなが定着しなかったし、そういうことをする人は、全然馴染めなかったし、飛び出した感じだったですね。だから、あれは紛争の生き残りをまねているという感じで見ていました。

私たちは、3年卒業まで、定期テストは一度もありませんでした。記念祭のとき来た先輩が、定期テストがないと聞いて「ああ都立大付属は変わって行く、自由も自治もなくなって行く」と言っていたのを憶えています。

ファイアーのことですが、ファイアーと言うと、みんな昔々に聞いた都立大付属のイメージというか（笑）そういうものがあるらしく、記念祭の頃になるといろんな先輩たちが来て「今年のファイアーはつまらない」とか、「ファイアーの火を消すな」とか盛んに言われ、記念祭の頃になると都立大付属の精神が急に燃え盛って：（笑）

そこで、何か反対するのが面白いか：私たちがときは、卒塔婆ではなく都立大学の民青が書いた立看を持って来て燃やしたりしました。

この学校は全学連が多かったから、陰険な対立があり、あとからゲバがあったとか聞くと、ファイアーのイメージも、陰険なものになってしま、伸び伸びとしない時代と言うか、カラッとし、押し込められた時代と言え

でしょうか。

私が卒業するとき同窓会名簿をもらい、ああ都立大付属は、昔はエリート学校だったんだな、学校群制度になって、ずいぶん変わったんだなと感じました。

### 伝統を語り伝えるシステムを

司会 それでは最後に、こういう部分だけは何としても残して行きたいとか、それについては、おれも自分の協力をしようではないかとか：（笑）そういうレベルから一言お願いします。

原田 最近の事情もよくわかりませんが自治会や校友会のような組織は、その中に何を盛り込むかは、その時代で変わっていくのでしようけれども、少なくともそういう組織は、教師の指導でやるのではなく、自分たちで作って運営する。最低限それだけはできる生徒であってほしい。

大石 その一つの方法になるかもしれない。それが、クラスマッチにしろ記念祭にしろ、一年から三年までの縦割りで行われますね。同じ学年同志は何かと繋がりがあありますが、縦の繋がりが少ない中で、こうした行事は、縦の繋がりを作る上で非常に良いシステムだと思っています。

猪熊 僕の希望は、やっぱり人数を減らすことじゃないかと思うんです。（笑）

昔の一年生一五〇人ぐらいにすれば元へ戻る——元へ戻るというのはおかしいけれど、かなり良くなるのではないかと。原因はマンモス化にあると僕は思うんです。

鈴木 私たちは、古きよき時代というものを殆んど知りません。齊先生から、昔は良かったということ、少し伺った

けなんです。

で、どのように良かったのかわからな  
いけれども、それを、ただ昔だけに終ら  
せて欲しくないと思います。

懐しいだけじゃなくて、まだ今からで  
も、残しておけるものが、たくさんある  
と思うし、そういうものを下に伝えて行  
く伝達方法……これは同窓会と関係して  
来ることだと思いますが、積極的な方法  
があるといいなと思います。

**吉原** 僕らの頃には三者懇談会というも  
のがあり、父兄と教師と生徒が、徹底的  
な討論をやったりしたことがあります。  
そのやり方で、先輩と生徒たちが話し  
合うような機会を設けるのもいいと思  
いますね。各方面で活躍されている方も多  
いことですから。

そうすれば、触れ合いの中で、先輩の  
良い所を吸収し撃がっていけるのではな  
いでしょうか。

僕らは、今でも都立時代に得たものを  
抛りどころにして生きていようなところ  
がありますから、先輩との交流の機会  
を作っていくことも、同窓会の役割りで  
はないでしょうか。

**金子** 僕は都立に来て、いつ見ても「汚  
ねえなあ」と思うんですね。まあ、きれ  
い汚いは別としても、自分の身の回りの  
こと——例えば、自治会やクラブ活動な  
どをしつかりやるだけの余裕が欲しいと  
思います。

多分、熟とか受験とかで、それどころじ  
やないと思うのですが、少くとも三年  
間はある学校ですから、もう少し学校を  
見るといっか、足をしつかりと見つめ  
なければいけませんが、いんじゃないかと思

います。

## 蔭で支えてくれた先生の力

**北村** 今までは、在校生に対する要望で  
したが、これは、私の狭い経験からです  
が、自由だ自治だと、全部自分たちでや  
って来たような気になっていますが、そ  
れを支えてくれたのは、やはり先生だっ  
たと思うのです。

で、先生方は、数学ならただ数学の知  
識を教えていけばいいというものではな  
く、(都立が)こういうふうになったのも  
大部分は先生の責任だと、僕は思ってい  
るんです。

確かに生徒の質は落ちたでしょう。そ  
れはあるにしても、落ちたは落ちたなり  
に、ちゃんとしなきゃいけないんで、学  
校を封鎖させたなんていうことは「先生  
が悪い」その一言に尽きる。

いままでも蔭になって支えてくださった  
わけですが、それが支えきれなくなった  
その点を先生はよく反省して、もう一度  
都立の教育を真剣に考え直さなければ、  
この学校は立ち直れないのではないかと  
思い、あえて言います。

## 良い環境を生かす熱意と努力を

**小林** 今の現役の人の感覚、年上の人に  
対する見方は、私の高校生だった頃と、  
本質的にはそんなに変わっていない気がし  
ます。

高校二年生の娘と話すとき「もう古いよ。  
お父さんの時代はそうだったんだ」と言  
いますが、私も親に対して同じことを言  
っていました。

ただ私の高校生の頃と比べてみると、

社会に対しての目の向け方 ちよつと  
頼りないような感じがします。どうせな  
るようにしかならないという、一種のし  
らけているところがあると思うんです。

皆さんのお話を伺っていると、都立の  
自由と自治というものに対する姿勢が、  
この30年間に、非常に大きなカーブを描  
いて変って来ているわけですが(現在は)  
社会的にも、学生運動全体を見ても、諦  
めムードといった、一種の挫折期に入っ  
ていると思うんです。

これは、しばらくたてば、必ず回復す  
る力を持っていると思うのですが、それ  
にしても、自分がこれから進んで行く社  
会の見方——それは批判であつても肯定  
であつてもいいのですが——自分なりの  
考えを持つ訓練をやつてもらいたい。

都立の学生組織には自治会という名前  
が与えられており、これは非常に独特な  
ものなのだというお話があつたけれども、  
それだけの環境や条件が、今でも備えら  
れているならば、それを生かす熱意や努  
力が湧いて来てもらいたいと思います。  
**司会** 私も出席者の立場から、進学とい  
う意味での名門校について一言。

私の女房が都立の名簿を見て、「いい大  
学に入学した時代はほんのわずかで、そ  
の時代でも、高校から就職していく人が  
ずい分多いのね」と言っていました。  
彼女も僕と同世代ですが、彼女が卒業  
した私立のお嬢様学校ですと、その頃で  
も必ず上の学校へ進学しています。

名門校だ何んだと言いますが、僕らの  
時代の都立だって、高校を出ただけで働  
きに出た人数の方が多いくらいです。特  
に女性は圧倒的に多かったです。

それにひきかえ今は、殆んど全員が高  
校へ入学し、更に、非常に多くの人が大  
学へ進学する時代です。

そういう点から見れば、都立だって時  
代とともに成長しているんで、単に(国  
立)大学の入学率だけで、いいとか悪い  
とかいう考え方はやめた方がいいし、そ  
んなことで都立を裁断するのはかわいそ  
うだと思つてわけです。

中には、大学などに行かなくてもいい  
という理論もありますが、殆んどが大学  
に進学するようになったということは、  
やはり日本は着実に進んでいますよ——

司会者の立場に戻り、いつたい都立に  
自由と自治があつたのだろうか、そんな  
ものが繋がっていたのだろうかという、  
ややペシミスティック(悲観的)な思  
いで席についたのですが、30年の間、いろ  
いろ不幸な事件もあつたけれども、自由  
と自治の伝統は、ちゃんと伝わっている  
んだということ、むしろオプティミス  
ティック(楽観的)な感じになりました。

都立の人間は、都会人間ですから、ど  
ちらかと言つて淡泊で、大いに愛校心を  
語つたり、同窓会を慈んだり、放歌高吟  
するといふ蜜カラな所がなく、非常に、  
「都会的紳士」であり、得てして、学校  
を批判し、背を向けがちだと思つて。

しかし、あまり気取つて背を向けてい  
るうちに、母校がなくなつてしまつては  
元も子もないので、いわゆる都立的淡泊  
さを捨てて、もう一度、都立論を聞かせ  
る必要があると思つています。

そういうことにしないと、わが都立の  
自由と自治の伝統は守れないんじゃない  
かという気がしました。

# 都立大学附属高校30年の歩み



昭和23年4月1日 都立高等学校尋常科を東京都立新制高等学校とし、初代校長は、旧制都立高等学校森脇大五郎校長が兼任。尋常科より99名を全日制第1学年として発足。

校歌、校旗、校章は旧制高校のものを継承して今日に至る。

9月30日 鈴木三之助、松岡正雄、萱本正夫、斉藤功、戸谷洋、網豊作先生、専任教諭に任命さる。

昭和24年3月5日 学区制の実施により第2学区に編入さる。

4月1日 都立高等学校尋常科130名を第1学年に編入し、男女共学を実施。女子生徒20名1学年に転入。

12月20日 校名を東京都立大学附属高等学校と改称。

昭和25年1月26日 東京都立大学附置学校となる。

2月23日 東京都立大学小笠原録郎助教授、第2代校長に就任。

4月1日 生徒自活会規約成案となる。

11月19日 木造新校舎落成。

昭和26年3月10日 全日制第1回卒業式98名卒業。

昭和27年4月1日 各学年3クラス、生徒定員450名となる。

太田清蔵氏により太田奨学会創設。

昭和31年6月2日 小笠原録郎校長ご逝去により鈴木三之助先生が校長代理。

8月3日 都立大学白旗信教授、第3代校長に就任。

昭和33年10月23日 創立10周年記念式典挙行。

昭和34年10月1日 都立大学穂刈四三二教授、第4代校長に就任。

昭和35年4月1日 学級増で第1学年4クラスとなる。

12月2日 父兄会の寄贈により、円型図書館落成。

昭和36年5月30日 木造2階建南校舎増築。

昭和38年3月31日 新館（B棟東寄りの一部）鉄筋コンクリート4階建落成。

4月1日 第1学年7学級350名となる。都立大学永倉俊充教授、第5代校長に就任。

昭和39年4月1日 第1学年6クラスと定まる。

昭和40年9月30日 生徒自治会館落成。

昭和41年3月15日 体育館落成。

6月1日 都立大学小場瀬貞三教授第6代校長に就任。

10月14日 学校群制度実施により、広尾、目黒高校とともに第23群となる。

昭和42年4月1日 都立大学古川原教授第7代校長に就任。

昭和43年3月15日 学園紛争が始まり、卒業式延期。

昭和44年9月10日 学園紛争激しく、封鎖が行なわれる。

昭和45年6月 再び学園紛争で封鎖。

12月1日 都立大学安岡善則教授、第8代校長に就任。

昭和46年3月31日 A棟東寄りの一部、鉄筋コンクリート4階建で新築落成。

昭和47年4月25日 A棟完成。

9月10月 三度学園紛争起る。

昭和48年3月12日 旧木造管理棟とりこわし。

4月1日 第1学年から、男女とも135名となる。

昭和49年4月1日 都立大学三浦武教授第9代校長就任。

7月20日 旧木造校舎とりこわし開始。

9月2日 B棟、A棟特別室増築落成。

9月24日 正門、バレーコート、テニスコートの整備を含み、環境整備工事完了。

12月25日 創立25周年記念誌刊行。

昭和50年10月19日 記念祭で1期生芝辻正昭氏講演。

10月 記念祭のファイアーで不祥事件。

昭和51年3月 卒業記念パーティー開催。

4月 2期制を廃し、3学期制とする。中間、期末テスト復活。

10月 記念祭におけるファイアー中止。

昭和52年3月15日 卒業式復活。

3月 自治会館改装工事完了部室整備。

4月 都立大学加崎英男教授第10代校長に就任。

6月 社団法人父兄会は父母会と改称し、PTA的活動を活性化。

10月 記念祭でファイアー復活。

三者懇談会（生徒・教師・父母）復活。

12月 体育館の屋根改修工事完了。

タイ国アユタヤ遺跡の仏頭（旧制府立高時代に預っていたもの）を校内で発見。

昭和53年4月 校舎内での上履使用励行。校内清美強化。

6月 社団法人父母会で所有している沼津牛臥寮の荒廃状況を視察。

8月 仏頭をタイ国に返還。

10月 父母会と同窓会で、沼津寮再建のための準備委員会が発足。再建へ一歩踏み出す。